

温故知新

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(33) 平成13年10月15日

江戸時代の旅の情報誌(2)

『東海・木曾両道中懷宝図鑑』(S290/225)

江戸時代の人々にとって「旅」は大きな楽しみの一つでした。人々は、社寺参詣や病氣治療のための湯治を名目に物見遊山の旅に出かけました。とりわけ長くつらい農作業を終えた正月から4月にかけての農閑期や盆前後に旅に出ることが多かったようです。

そうした庶民の旅の隆盛を受け、江戸中期以降には宿場の様子や宿場間の距離、あるいは街道の名所や旧跡、名物などを紹介する道中記や名所記の類が数多く出版されました。今回紹介する『東海・木曾両道中懷宝図鑑』もその一つで、1765(明和2)年に江戸の須原屋茂兵衛を板元に刊行されました。木曾道とは中山道のことで、江戸の北西板橋宿を起点として草津宿で東海道と合流しました。全行程は129里10町8間(約508キロメートル)で、その間に板橋宿から守山宿までの67宿がありました。しかし、一般的には東海道草津宿・大津宿を加えた江戸 京都間を木曾街道69次と呼び、本書も大津・草津宿を加えた記述がなされています。ちなみに東海道は全行程126里6町1間(約496キロメートル)で、53宿ありました(大坂までの伏見・淀・枚方・守口の4宿を加えて東海道57次ということもあります)。

さて、本書は東海道と木曾路の各宿場の様子や街道沿いの風景を描いたものです。その凡例に「上の方に東海道を写し、下の方に木曾路を図して、いずれの道を行くにも重宝とす」とあるように、上段に東海道、下段に木曾路を描いています。しかも、東海道は江戸から京へ向かう上りを記し、反対に木曾路は下りの行程を描いています。

こうした街道の様子を描いたものとしては、古くは1690(元禄3)年に出版された遠近道印編・菱川師宣画の『東海道分間絵図』があります。これは正確な縮尺(1万2000分の1)で描かれたもので、大好評を博し、何度も改訂版が出され、あるいは縮尺を縮めた小型版も出版されています。

それに対して『東海・木曾両道中懷宝図鑑』の大きな特徴は、宿場間の距離に関係なく、見開き1頁で1宿を描いていることにあります。本書は、その書名に「懷宝」とあるように、旅に出る際に入れて持ち運びができる縦16センチメートル、横11センチメートルの小型本です。分間絵図の類は折本式道中絵図でしたが、本書は縦綴じ本であるため、利用者の見やすさを重視して見開きで1宿を描こうとしたのでしょう。ただ、紆余曲折する街道を横長の画面に描くことは無理があるため、各宿場の冒頭に「東西」の方角が書き入れられているのは、分間絵図と同じです。

本書は小型本ながら、旅先へ携行することを目的としているため、表現は簡潔ですが、多岐にわたる情報を記しています。次宿までの路程、宿場や街道沿いの寺社・旧跡、名物、宿場間に設けられた休泊施設である立場、道中の目安となる山々の名前が記されています。

このほか大河川の渡船・徒渉の別も記されています。旅人にとって川越しは、それだけ大きな問題だったのです。たとえば舞坂宿の項には「今切渡船」が描かれていますが、その詞書には「宝永の頃、今切に板を打ちて海波をよけてより舟行安穩なり」とみえます。1707(宝永4)年の宝永地震で今切口が大きく決壊し、また新居宿の移転により渡船の航路が約6キロメートルにもなったために、渡船の安全のために波除け杭がうたれました。そのことに触れながらも、「舟行安穩」とあるところに、旅の案内書らしさがうかがえます。

<参考文献>

『道中記集成』第11巻(291.09/柗)